

和算家・測量の名人

いし かわ き へい
石川喜平

石川喜平は、1788(天明8)年刈谷藩の領地である碧海郡高棚村(現安城市高棚町)に生まれ、生家は高棚村の地主で経済的にはかなりゆとりのある家庭であった。

20歳で碧海郡合歡木村(現岡崎市合歡木町)の和算家「清水幸三郎林直」の門に入り5年近く修行の後、1812(文化9)年2月に師範から免許証を授かる。その後、喜平は師範として理論的な和算を極める一方、実用和算にも大きく目を向けていった。このため、様々な階級の者が喜平の門に弟子入りした。和算は日本で独自に発達した数学であり、喜平は特に測量、天文、暦の分野に意欲的だった。加えて、高度の知識と技術をもっており、優れた教育者であったことも、残っている資料から推察できる。教える階層や内容の程度は非常に幅広いものであったようで、普通の寺子屋とは異なり、庶民の生活に生きる実用和算を教えていた。

喜平が師範になった年、和泉村の都築弥厚は根崎陣屋の代官に就き大きな夢を計画していた。弥厚の新開計画は用水路の開削を伴うものであったため、喜平の頭脳を頼りに科学的、技術的裏付けを求めた。この計画の困難さを十分に予測していた喜平であったが、実現へ向けた強い自信と積極性を持った弥厚の説得に心を動かされ、測量を承諾する。この時、弥厚は58歳、喜平は35歳で働きざかりになっていた。

1822(文政5)年弥厚と喜平は測量を開始し、5年近くを費やして完了した。当時の技術と測量器具によって完成した用水路測量図が現在も高く評価されるのは、喜平の測量知識と技術が大変高度なものであったことを示している。

晩年は生きるために農業をし、教える楽しさと学問する喜びを味わう事が、喜平の生きる道であったと思われる。そして多くの弟子たちは、学者として、また教育者として熱心な喜平の姿に心から感動した。その学問の深さに畏敬の念を持って建立された墓碑は、今も立派に建っている。1862(文久2)年75歳で没し、高棚村の土となった。

石川喜平像

安城市立高棚小学校内(安城市高棚町)

